狂犬病感染 原因は子犬

大分大と長崎大、フィリピンで大規模調査

咬傷の軽視が死亡に直結／ワクチン接種の見直し提唱

大分大学医学部微生物学講座・グローカル感染症センターの西園晃教授と齊藤信夫客員教授（長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点准教授）らの研究グループは、フィリピンでの3年間の前向き患者登録研究から、これまで不明だったヒトへの狂犬病感染の原因動物が、成犬ではなく子犬であることを明らかにした。研究グループは全世界での子犬へのワクチン接種方法の見直しを強く提唱している。Frontiers in Microbiologyに掲載された。

フィリピンでは、年間200人から300人が狂犬病で亡くなっている。新型コロナのパンデミックの影響で、動物の狂犬病ワクチン接種率が低下し、狂犬病の発生がさらに増加している。現在フィリピンでは、年間100万人以上の人々が動物咬傷後の狂犬病発症予防のためにワクチンを接種しているが、非常に大きな経済的負担になっている。

これまで狂犬病患者に関する詳細な検討は行われておらず、原因動物の年齢など詳細は分かっていなかった。そこで研究グループは、フィリピンで狂犬病患者の感染原因を詳細に検討した。

狂犬病の疑いのある患者が病院に運ばれると、研究チームは通知を受け、病院を訪問して患者と家族に連絡を取り、アンケートを実施。こうした地道な活動を3年間行い、狂犬病患者の前向き研究としては最大規模となる151例の狂犬病患者を登録した。

狂犬病関連の咬傷歴あるいはその可能性のある患者133人のうち、特定された原因動物は犬が129例、次いで猫4例だった。これらの動物のほとんどは、患者の世帯（51人）または近所の人（29人）が所有していた。年齢が記録された68頭の犬のうち、大多数は子犬で、27頭（39・7％）が生後3カ月未満、13頭（19・1％）が生後4～11カ月だった。多くの場合、咬傷発生後10日以内に原因動物が死亡している。かまれた場所は、手が42・1％で頭や首は12・8％だった。中には、ひっかきや傷口をなめたことで感染した例もあった。かまれた患者131人のうち、124人（93・2％）の患者はワクチンも抗狂犬病ウイルス免疫グロブリン（RIG）も接種しておらず、このうち115人は暴露後予防接種（PEP）のために医療施設を受診しなかった。

研究の結果、各家庭で飼っているペットが狂犬病の原因動物であり、さらにその多くが子犬であることが明らかになった。これは以前に研究グループがフィリピンで行った動物狂犬病の大規模研究で得られた結果とも一致している。

これは子犬への狂犬病ワクチン接種方法に問題があることを示唆しており、研究グループはワクチン接種方法の早急な見直しが必要であることを提唱している。さらに、動物咬傷後に発症予防処置を受けない最も一般的な理由として、軽度の咬傷であるために自己判断で治療の必要がないと考えるケースが多く、それが狂犬病による死亡につながることが多いことが明らかになった。

狂犬病は世界中で蔓延している。特に蔓延国へ旅行する際の日本人渡航者は注意が必要だ。2019年には、フィリピンを訪れたノルウェーの女性が、助けた子犬にかまれた後、狂犬病で亡くなるという事例も発生した。動物にかまれた場合、たとえ軽症であってもすぐに咬傷部位を15分以上洗浄し、現地の動物咬傷外来を受診することが重要だという。また、狂犬病ワクチンやRIGの接種は、発症をほぼ100％防ぐことができるため、これらの対策をとることで、狂犬病のリスクを大幅に減少させることができるという。

西園晃グローカル感染症研究センターの話「狂犬病で亡くなる患者の原因として、これまで認識されてこなかった子犬が、感染原因の多くを占めることがわかったことは大きな意義がある。流行地では子犬などでも油断せず、むやみに動物に近寄らないこと。もし、かまれた際はどんなに軽い傷でも医療機関を受診することが必要だ」